

ヤマト福祉財団

YAMATO WELFARE FOUNDATION

NEWS

NO.
89

2026.10.20
AUTUMN



助成先レポート Vol.54 | (社福) 正和会 A・I Hope

ゼロからの水産加工業
宇和海の恵みを雇用につなぐ



| 巻頭特集 | 農福連携

農業と福祉が出会うと、 地域が変わる



『働く態度』の 支援について一緒に 考えていきませんか



東京学芸大学名誉教授
社会福祉法人武蔵野千川福祉会

理事長 菅野 敦

Profile

1954年、北海道生まれ。養護学校（現・特別支援学校）に4年間教員として勤務した後、専門性を深めるため大学院へ進学。修士・博士課程の7年間、「心身障害学」を専攻する。その後、東京学芸大学に勤務し、31年間にわたり知的障がい者の心理を研究。退職後も研究を続けながら、社会福祉法人武蔵野千川福祉会理事長を務める。

障がいのある方の心理学を専門としてきた私は、障がいがあっても環境との相互作用である「学習」を通じた発達の可能性について永年、取り組んできました。その方法として採った知的障がいのある方の乳幼児期から成人期、老年期の発達特徴の解明から、「人は生涯を通して発達している存在であること」そして、「各ライフステージは、その時期に経験し、身に着けておかなければならないこと」に取り組み唯一の時期であること」を学びました。そこから私は『生涯発達支援』という視点をもつようになりました。

『生涯発達支援』において「働く」ことの支援は、障がいのある方においても重要な支援内容です。人は働くに際し、就く仕事に関する知識・技能の習得は必須です。企業等の職場においても多様性を活かす誰かが働けるよう知識・技能の習得に関する支援はもちろん、職場環境そのものも分かりやすく、働きやすさをめざした改善が行われています。

ところで、人は整った環境のもと、仕事に関する知識・技能を身につけていれば仕事に就き、その仕事の達成に至れるのでしょうか。さらに、仕事をこなしていくことを続けることでキャリアアップを図ることができるのでしょうか。近年、働く人には働く力を支える能力としてヒューマンスキルな

CONTENTS

3. 農福連携 農業と福祉が出会うと、地域が変わる
7. 助成先レポート Vol.54 （社福）正和会 A・I Hope
ゼロからの水産加工業 宇和海の恵みを雇用につなぐ
10. 2026年度 ヤマト福祉財団助成金／ヤマト福祉財団奨学金
全国で助成金・奨学金の贈呈式を行いました
12. 人は自立して生活することで幸せを感じられる
2026年 障がい者の働く場パワーアップフォーラム
14. 研修・育成プロジェクト
16. 2026年度 ヤマト福祉財団農業ボランティア
18. 2025年度 ヤマト福祉財団収支概況



表紙写真：2023年度助成先の（社福）正和会 A・I Hope。旧九島小学校を改装した工房前でみなさんと。



日本障害フォーラムが
推進するイエローリボン
運動に賛同しています。

農業と福祉 が出会うと、 地域が変わる



農業と福祉をつなぎ、一人ひとりの仕事や役割をつくり、地域のつながりを育む「農福連携」。その取り組みは、福祉や農業の枠を越え、地域の新たな可能性を広げています。

農福連携によって生まれること



① 仕事生まれる

一人ひとりに合った働く機会が広がる



② 農地が活きる

人手不足の農作業や、使われていない農地の活用につながる



③ 人がつながる

福祉事業所、農家、地域の人との交流が生まれる



④ 地域が元気になる

仕事や商品、新しい人の流れが地域へ広がる

農業と福祉 それぞれの課題を、お互いの力に

農業では、こんな課題が…



担い手が減っている



農業従事者の高齢化が進んでいる



使われなくなる農地が増えている

農業×福祉



農福連携

それぞれが持つ力を活かし合い、新しい仕事や役割をつくる。

福祉では、こんな課題が…



一人ひとりに合った働く場を増やしたい



仕事による給料・収入を高めたい



社会や地域と関わる機会を広げたい

いろいろな人が、
いろいろなかたちで、活躍できる

百姓という言葉があるように、農業には、体を使う仕事もあれば、細かな作業や、同じことを丁寧に繰り返す仕事もあります。さまざまな工程があるからこそ、一人ひとりの得意なことや特性に合わせて役割をつくりやすい。それが農業と福祉につながる理由の一つです。一人ひとりの「できること」が仕事になっていきます。



丁寧に繰り返す仕事



細かな違いを見分ける仕事



体を動かす仕事

なぜ、農業なの？

農業には、 “百の仕事” がある

農業と福祉
それぞれの「困った」を
新しい力へ

畑を耕す。種をまく。草を取る。収穫する。採れた作物を洗い、選別し、袋に詰める。農業には、実にさまざまな仕事があります。こうした特徴を生かし、障がいのある人たちの働く場や社会参加につなげていく取り組みが「農福連携」です。

農業の現場では、担い手の減少や高齢化、農地の荒廃が課題となっています。一方、福祉の現場にも、働く機会をどう広げるか、給料や収入をどう高めるかという課題があります。

農業と福祉。それぞれが抱える課題を、一方が一方を「助ける」関係ではなく、お互いの力を生かし合う関係へと変えていく。そこから、仕事生まれ、農地が活用され、人と人とのつながりが生まれる。

農福連携は、福祉や農業という分野を越えて、地域の課題解決にもつながる取り組みとして広がっています。

働く場を、「続く仕事」へ

農業を始めるだけでは
農福連携は続かない

農福連携によって、新しい働く場が生まれる。それは大切な第一歩です。しかし、その仕事が一時的なものに終わってしまえば、利用者の暮らしを支える安定した収入にはつながりません。農福連携を続けていくために欠かせないのが、「経営」という視点です。

どんな作物をつくり、いくらで売るのか。誰に買ってもらうのか。農産物をそのまま販売するのか、加工して新しい商品にするのか。農作業が少ない季節にも仕事をつくるにはどうすればよいのか。福祉事業所にも、こうした「事業を育てる」という考え方が必要になります。

一方で、効率や利益だけを追い求めればよいわけでもありません。一人ひとりの特性や得意・不得意に合わせて作業を工夫し、その人が力を発揮できる仕事をつくることも欠かせません。利用者が仕事に手応えを感じ、商品が売れ、そ

「福祉」「農業」「経営」 三つの視点を現場へ

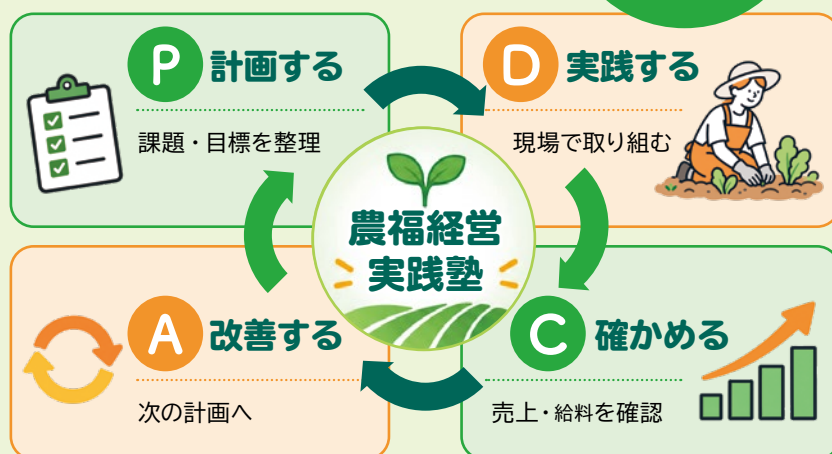
ヤマト福祉財団が取り組む「農福経営実践塾」では、農業に取り組む福祉事業所の責任者などが参加し、それぞれの課題を整理。農業技術だけでなく、経営、就労支援、商品開発、販路拡大などについて学びながら、具体的な改善策を考えます。計画を立てて実践し、成果を検証し、さらに改善する。PDCAを繰り返すことで、事業所が自ら事業を成長させる力を身につけていきます。目指すのは、利用者に安定した仕事をつくり、給料を高めていける事業所を育てることです。

農福経営実践塾で
取り組む
PDCA



農福連携の価値を
商品から伝える

認証された商品に表示される
マーク。商品を選ぶことも、
農福連携を応援する一つの方
法です。



の成果が給料として還元される。
そんな循環をつくるのが、持続
可能な農福連携につながります。

つくるだけでなく
「選ばれる」商品へ

事業を続けるためには、つくつたものを「どう売るか」も重要です。丁寧に育てた農産物も、買ってもらえなければ収入にはつながりません。品質を高め、加工で付加価値を生み出し、商品の魅力や背景を消費者に伝えていくことも大切な仕事です。

その価値を見える形にする仕組みの一つが「ノフクJAS」です。障がいのある人が生産工程に携わった食品や観賞用植物について、生産方法や表示の基準を定めた日本農林規格で、一定の基準を満たして認証された商品にはノフクJASマークを表示できます。商品が生まれるまでの背景を知り、選び、買う。消費者のそうした行動もまた、働く人の仕事を支え、農福連携を続けていく力になります。



農福連携が広がるにつれて、その取り組みに関わる人たちも多様になっていきます。福祉事業所と農家が一緒に農作業をする。そこに、農産物を加工する企業や販売する店舗、地域の仕組みづくりを支える行政、体験学習などを行う学校、商品を購入する消費者が加わっていきます。

作る人だけでなく、売る人、届ける人、買う人も農福連携の一員になれる。その輪を社会全体へ広げる動きが、全国各地で生まれています。

農福連携は、地域から社会へ さまざまな人や組織がつながり 農福連携の輪は社会へと広がっています

農福連携の輪は、こんな分野にも



優れた実践を 次の地域へ

全国各地の優れた農福連携の取り組みを発掘し、その工夫や成果を広く伝えるのが「ノウフク・アワード」です。農福連携等応援コンソーシアムが2020年度から実施し、全国への発信を通じて、次の地域での実践につなげています。

その広がりを 財団も支えています

農福連携を地域に根づかせるには、新しいことに挑戦するための資金や、経営を学ぶ機会、活動を支えてくれる人とのつながりが必要です。

ヤマト福祉財団では、「農福経営実践塾」で事業を担う人材を育てるほかに、「助成事業」を通じて新たな活動を支援したり、「農業ボランティア」では労働組合の協力のもとヤマトグループ社員と福祉事業所を直接つないでいます。

支援の形は違っても、その先にあるものは同じです。障がいのある人の仕事をつくり、続けられる事業に育て、地域とのつながりを広げていくこと。こうした活動を支えているのが、ヤマトグループの皆さまから寄せられる賛助会費や寄付です。

**農業と福祉
が出会うと、
地域が変わる**

多様な仕事をつくり、事業として育て、地域の人や組織とつながる。「こころん」の実践には、これまで見てきた農福連携の可能性が、一つの形として表れています。

さらに、離農した農家から農地を借り、地域農家から農作業を請け負う。直売所では地域農家の商品も販売。地域住民の雇用や学校・大学の実習生の受け入れなど、活動は事業所の外へ広がりました。

農産物を加工し、自分たちで販売することで、農作業の少ない季節にも仕事をつくる。生産・加工・販売をつなぐ経営の工夫が、仕事を続ける力になります。売上を利用者の給料に還元することも大切です。

**農業から始まった仕事が
地域をつなぐ仕組みへ**

**一人の「働く」が
地域の未来につながるっていく**



地域との接点

直売所・カフェ
地域農家の商品も扱い、販売の輪を広げる。



多様な仕事

農場・養鶏
一人ひとりに合った役割をつくる。

**こころんの
仕事づくり**



続く事業

加工
商品づくりで、季節を越えた仕事へ。付加価値を付け収入UP。



社会への広がり

移動販売
商品を届け、人と人のつながりを生む。

農家や福祉事業所だけでなく、企業、行政、学校、消費者へ。農福連携の輪は、さまざまな人や組織へと広がっています。では、そのつながりが一つの地域で形になったとき、どのような変化が生まれるのでしょうか。福島県の「こころん」の取り組みから、農福連携の可能性を見ていきます。



熊田 芳江 さん

(一社) 空 代表理事
(一社) 日本農福連携協会 顧問
第14回ヤマト福祉財団小倉昌男賞 受賞

長年にわたり、農業を活用した障がい者就労支援、6次産業化、地域連携に取り組む。ヤマト福祉財団「農福経営実践塾」塾長。

農福連携で地域を元気に

農福連携は、ただ農業をして収入を増やすだけの取り組みではありません。一人ひとりに合った仕事を、きちんと事業として成り立たせることが大切です。

財団の農福経営実践塾では、以前から課題の整理、計画、実践、検証、改善を重ね、売上や給料の向上につなげることを大切にしてきました。国も給料向上や事業運営の成果をより重視する方向へ進む中、その重要性は増していると感じます。

小倉昌男さんの「障がいのある人の自立を支える」という思想が、今も実践塾に受け継がれていることを大切に思います。貴重な学びや挑戦の機会を支えてくださるヤマトグループの皆さまに感謝しています。

ゼロからの水産加工業

宇和海の恵みを雇用につなぐ

愛媛県西南部の宇和島市で、就労の場づくりに取り組んできたA・I Hope。夕日の美しい小さな島で2024年、水産加工業に乗り出しました。新しい職域の開拓へ未経験からの挑戦です。この夏にはネット通販もいよいよ開始し、事業の加速を図ります。

うろこを落としたマダイを、慣れた手つきで三枚に下ろしていく利用者さん。宇和海産の立派なマダイを極上の干物に仕上げます

地域に根ざして 困り事に向きあう

のどかな海にかかる大橋を渡ると、ほっとする風情に包まれます。宇和島港の沖合に浮かぶ「九島」は人口約700人ほどの小島。四国本土と10年前に橋でつながりました。

「島の思い出ピアノ」という一風変わった名前前の食堂が島の一角にはあります。橋がかかったがゆえに学校や診療所は島外のものと同統合され、閉鎖されました。その廃校となった小学校の音楽室をそのまま生かし、地域の人々の食と交流を支えるユニバーサルレストランとして5年前に開店しました。

「私たちが取り組んでいる地域共生社会づくり事業の一つです」と語るのは、A・I Hopeの統括部長・清水洋平さん。

彼らが新たに挑んだのが、隣の家庭科室を利用した干物の製造販売事業です。製造に欠かせない食品乾燥機や真空包装機、冷凍庫などの整備費の一部に、当財団の助成金が活用されました。

A・I Hopeのルーツは、病院を有する姉妹法人が、退院患者の就労先づくりを40年ほど前に始めたことに遡ります。現在は市内各所で、農園事業や清掃洗濯、売店業務などを通じて障がい者の就労をサポートするのみ



「九島ひもの工房」とレストラン「島の思い出ピアノ」が入る旧九島小学校



架橋される10年前まではフェリーが四国本土をつなぐ唯一の足だった「九島」

DATA

社会福祉法人 正和会

A・I Hope

愛媛県宇和島市 就労継続支援A型事業所

2023年度 障がい者給料増額支援助成金
「地域資源を活用した活動分野の拡大による給料増額プロジェクト」(500万円)
助成内容：食品乾燥機、真空包装機等の購入資金



塩分濃度など加工の肝は「知り合いを通じて、市内唯一の加工業者さんに教えを請うたり、あちこちの干物を食べ比べて、参考にしました」と、A・I Hopeの統括部長・清水洋平さん



どれも自慢のケンサイカ、マダイ、カマシの一夜干し。ラインナップの一部は旬に応じて変わります



〈上〉下処理した魚は、助成で整備した食品乾燥機へ。ワンボタンで翌日には、ばっちり仕上がります
〈下〉レストラン業務と兼務の利用者さん。商品をていねいに真空包装機でバックしていきます。複数の袋も一度に封ができるスグレもの

VOICE /

通販で、宇和島の味をもっと身近に

らくうカードの導入の際に、B2伝票への切り替えや運用方法のサポートで伺いました。宇和島の魚はとてもおいしく、干物なら焼くだけで家庭でも気軽に味わえる点も魅力です。初訪問時には真空包装・冷凍設備やPC、プリンターなどが整っており、通販もすぐ進められそうだと感じました。工房や隣のレストランで、みなさんが楽しそうに仕事をされていたのも印象的でした。



ヤマト運輸株式会社
愛媛法人営業支店
光成 和歌 さん

ならず、高齢者支援など地域の幅広い課題の解決にも取り組んでいます。

「農園事業も大きくなって、米は10トンをつくる規模になったのですが、規模が拡大したからといって、働ける利用者さんが同じように増えるわけではありません。なにか、これまでとは違う職域、事業モデルも立ち上げたほうがよいのではないか、という話を持ち上がりました」

いろいろな案が検討されましたが、廃校の家庭科室を生かす方策が模索されました。

島の高齢者に向けた配食見守り弁当

事業のキッチンとして、すでに家庭科室を利用していたからです。そして、九島の目の前は宇和島海。リアス式海岸の先に広がる好漁場で、タイの養殖は日本一の出荷量です。

農福のつぎに目指すは 水福連携

「じゃあ、魚をやろうと。活きのいい鮮魚が中心のこの辺りで加工をやっている人は少ないんですが、あえて干物を選びました。日持ちがしますし、専用のトラックを仕立てなくても物流に

乗せやすい。販路を島外へ広げやすいと考えました」

干物の製造事業は2024年、ついに本格的なスタートを切りました。宇和島や九島のことを知ってもらえればと、「九島ひもの工房」と土地の名をブランドに冠しました。現在は加工専属の利用者が1名、レストランとの兼務で1名の利用者さんが働いています。

加工場を覗くと利用者さんが、それは立派なマダイをさばっていました。長さ重さの違う包丁を巧みに使い分け、器用に調理していきます。時に冗談も飛び交い、技術指導の支援員さんとも

和気あいあいです。

「彼は魚に触った経験がないということでしたが、料理が好きだということで、新卒採用となりました」と清水さん。

レストラン兼務の利用者さんは洗濯事業からの異動。今では接客にも慣れて、細やかな心遣いも見せる頼もしさ。「彼女は芸術のセンスも高くて、メニュー黒板やレストランの公式Tシャツのデザインも手がけています」

加工部門の売上は昨年度に約140万円を達成。干物を始める以前は8・9万円ほどだった平均月額給料も、約12・5万円にアップしました。

A・I Hope 売上と利用者給料のおおよその推移 (就労継続支援A型)

年 度	2023	2024	2025	2026
	実績			計画
全事業売上(万円)	4,595	5,005	5,644	6,175
水産加工売上(万円)	0	38	138	170
在籍数(人)	18	18	17	17
1人当たり 月額給与(円)	89,126	104,417	124,572	148,897



〈上〉らくらうカート導入のサポートにあたったヤマト運輸の光成さん(左)。「これなら導入できそうだって調べてみたら、なんだヤマト運輸さんのサービスなのかって、後で分かりました」と清水さん(右)九島ひもの工房のみなさん



新鮮な魚をいつも納めてくださる魚店さんと



バックされたばかりの商品はすぐさま、隣に設置した液体急速冷凍機で鮮度そのままに-30℃で冷凍されます



星明かりを辿るように 一つひとつ

とはいえ当初、水産業は誰もまったくの未経験。すべてが暗中模索だったそうです。

「仕入れ先は宇和島の漁業関係者に教えてもらいました。市内の業務用鮮魚店です。事情を話すと『障がいのある方の就労につながるなら協力するよ』と。本来なら遠くて難しいところ、九島まで届けてくれます」

また、助成がなければ機器を整備できず、そもそも事業を立ち上げられな

かったかもと清水さん。商品の衛生面から天日干しは採用できないと考えたからです。自分たちの規模に合う機種を厨房機器業者などに教わり、障がい者でも使いやすいものを選びました。

乾燥機は魚をセットし、量や魚種に合ったボタンの一押しで、翌日には設定通り仕上がります。番号を振ったマニアルも作って、誰でも迷わず作業できるよう工夫しました。

「最初は、魚の種類によって塩味がばらついたりもしましたが、1年通して魚を仕入れて、魚種ごと、季節ごとの味のコントロールができるようになった

りました」

この7月にはECサイトもオープン。よそのお店が利用しているのを見て、ヤマト運輸のへらくらうカートへのサービスに辿りついたそう。工房を訪れ、設定のサポートをした愛媛法人営業支店の光成さんも、「福祉財団の助成を活用して始められたと聞いてうれしくなりました。まずはネット販売を活用して販路の拡大をしていくのが目標と清水さん。ですが、いずれは市中心部にも、水産加工品や育てた農産品の販売拠点を設けたいと、早くも先のビジョンを描き始めています。

Series 49

労働組合支部執行委員長 助成先訪問



思いをつないで一滴を大河に

利用者さんが実際に魚をさばく様子を拝見しましたが、力のいる作業だと思います。それをしっかりこなされていて感心しました。

幼い頃から障がいのある方と接する機会があったのですが、助成が役に立っているところを目の当たりにすると喜びもひとしおです。

支部単位で集まる金額だけを見ると、小さく感じるかもしれませんが。ただ、それが全国から集まることで大きな額になり、各地の支援に使われている。だから、一人ひとりでは微力でも決して無駄ではありません。

一番大切なことは、小倉昌男さんの意思を継いでいくことだと思います。率直に言えば、利用者さんの手取りが増えて、生活が豊かになっていくこと。誰もがより豊かな暮らしができるように応援していきたいですね。



ヤマト運輸労働組合
愛媛支部執行委員長
河野 心 さん



2026年度 ヤマト福祉財団助成金



全国で助成金の贈呈式を行いました

今年度は283件の応募があり、43の福祉事業所・団体が選考されました。助成総額は1億1,946万円です。



青森主管

株式会社 アイツーリンク



千歳主管

社会福祉法人 あけぼの福祉会



埼玉主管

NPO法人 みのり



流山主管

合同会社 KUKURU



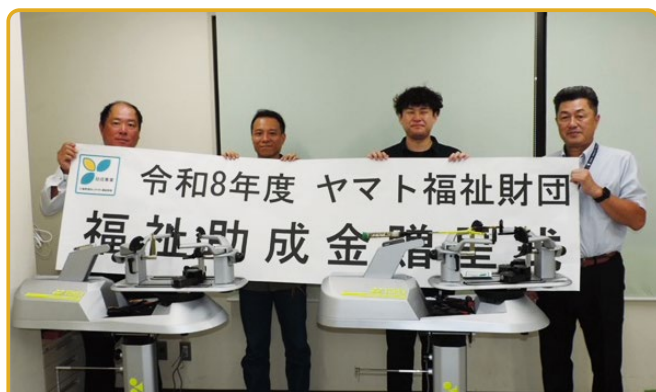
小牧主管

社会福祉法人 まちスウィング



福井主管

社会福祉法人 福授園



奈良主管

社会福祉法人 ぶろぼの



東大阪主管

社会福祉法人 讃良福祉会



愛媛主管

株式会社 Improvement-Base



山口主管

社会福祉法人 山家連福祉事業会



宮崎主管

NPO法人 笑福会



久留米主管

社会福祉法人 かだん

2026年度 ヤマト福祉財団奨学金

奨学金の贈呈式を行いました

ヤマト福祉財団では、社会の役に立ちたいと学ぶ障がいのある大学生に、月額5万円（返済不要）の奨学金を給付し、学びを応援しています。
今年度は、80名の応募があり、8名が選考されました。



鈴木 我信 さん

慶應義塾大学
環境情報学部環境情報学科2年



瀧田 紗綾 さん

郡山女子大学
生活科学部食物栄養学科1年

2026年

障がい者の
働く場
パワーアップ
フォーラム



7月
24日(金)
東京会場

灘尾ホール
(千代田区霞が関)

特別報告



きょうされん「能登半島地震」災害対策本部
事務局長、(社福)さくらんぼの会 理事
大野 健志さん
災害で浮き彫りになったのは、平時から
置き去りにされていた障がい者の姿

小倉昌男賞受賞者講演



(社福) ゆずりは会 理事、就労継続支援B
型事業所 菜の花 管理者 小淵 久徳さん
大切なのは、必ず工賃を上げるという強い
意志。みなさんは、共に働く仲間にくら
支払うと約束しますか？

基調講演



(NPO) 日本障害者協議会代表
藤井 克徳さん
障がいのある方が当たり前に暮らす地域づ
くりと、個々への適切な支援。この二つで
社会的障壁を取り除く

本年度のテーマは

特性を力に

個性を活かした働き方で最大の成果を導く

障がい者福祉関係者の学びと
出会いの場として30年

「今回は、小倉昌男初代理事長が本
フォーラムの前身となるセミナーを
開催してから30年目となる節目の年
となります。この間、障がいのある
方を取り巻く環境は大きく変化し、
今年7月に法定雇用率は2.7%に引
き上げられました。しかし一般就労
だけが障がいのある方の求める答え
ではありません。A型・B型事業所
への期待はより大きくなっています。
本日は、素晴らしい実績を上げら
れている方たちがたくさん登壇され
ます。でもその話に感心しているだ
けでは、前に進めません。憧れで終
わらせず、自分なりの新たな目標、
決意を抱き、ぜひ明日への一歩につ
なげてください」。開幕の主催者挨
拶で山内理事長は、そう来場者に呼
びかけました。

一人ひとりの希望、特性を
アセスメントし高工賃を実現

2026年度の会場は、東京と大
阪です。「特性を力に、個性を活か
した働き方で最大の成果を導く」を
テーマに、仕事の拡大や給料増額
でチャレンジングな試みと成果を上
げて来た方々のお話を伺うことに。

基調講演は(NPO) 日本障害者
協議会代表の藤井克徳さんが、障が
い者福祉に関する昨今の課題やトレ
ンドなどを最新の数字をあげて解説。

小倉昌男賞受賞者講演では、農福
連携の第一人者の(社福) ゆずりは
会 理事 小淵久徳さんが、成功の検
証と再現、機械化での生産性と効率
向上などを伝えました。

次に特別報告として、能登半島地
震でボランティア活動を展開された
きょうされん「能登半島地震」災害
対策本部の事務局長 大野健志さん



「これなら私たちにもできるかもしれない。
そんな心に残るヒントの一つでも持ち
帰ってください」 山内理事長

東京会場 当事者発表



(社福)豊芯会ふれあい
ファクトリー

大嶋 千鶴さん

ふれあいカフェで働きながら大好きなアルフィーのライブに。特技は絵を描くことで、みんなに似顔絵をプレゼントしています



(社福)ゆずりは会菜の花
小林 潤さん

仕事のモチベーションは、いろんな機械を使いこなすこと。いつかトラクターも乗りこなせるになりたい。新しい機械が導入されるとワクワクします



9月
4日(金)
大阪会場

マイドームおおさか
(大阪市中央区)

大阪会場 当事者発表



(社福)ひびき福祉会
岡本 菜穂さん

お菓子作りの仕事の休憩時間に、ゲームやアニメと同じ趣味を持つ仲間とおしゃべりが楽しみ。好きな物を買う給料日が近づくワクワクして来ます



(株)カムラック大阪
下屋 研一郎さん

AIを活用しSNS・動画制作を担当しています。苦手を克服するより好きなことを仕事にし、得意にしていきたい。誰かの役に立てるこの仕事は僕の生きがいです

実践報告



(NPO)クラシーズ 理事長
中島 代志美さん

「だれが、どこで、なにに気をつけ、どんな仕事を行うか」ラインワークスも使い、職員が連携して利用者さんを支援します

実践報告



(株)ジューヴル 代表取締役
池添 幸子さん

福祉だからと言い訳しない。利用者さんそれぞれの特性を活かした働き方で、地域の食材を使ったスイーツを

実践報告



(株)カムラック Come Luck
ラボ西新 管理者 要永 みきさん

企業、利用者さんとのヒアリングを繰り返し、みんなで定着率の高い就労を目指しています

両会場合わせて200名以上が参加、
全プログラムが90%以上高評価に

登壇者みんな視点が
違い、どれも思いも
つかない発想ばかり

「仕事」に焦点を当て
た研修は初めてで、
とても勉強になった

参加する度に新
たなヒントが、
早速、職員間で
共有したい

私にできることから
始めていこう！と、
ワクワクしています

当事者の声に感動し
涙が...
うちの利用者さん
にも希望を与えたい

できないというフィ
ルターをかけず、
一人ひとりの可能性
を見つめたい

が、被災地で目の当たりにされた障がいのある方たちの状況を報告。
実践報告では(株)カムラック Come Luck ラボ西新管理者の要永みきさんが、独自に展開する企業と連携した就労への段階的支援を。(株)ジューヴルの代表取締役 池添幸子さんが、スイーツ大国北海道で成果を上げて来た方法を。(NPO)クラシーズの理事長 中島代志美さんは、仕事と楽しみを両立させ、生活の質を上げる工夫を、とそれぞれの取り組みを報告しました。
続いてパワーアップフォーラムの

シンポジウムでは、来場者との質疑応答も展開。「酷暑のなかで利用者さんの農作業をどう支える?」「就労支援での企業と福祉施設の役割分担は?」「利用者さんのやる気を高める方法は?」「利用者さんの工賃は能力や成果などどんな基準で決めている?」「パティシエがいなくて売れるスイーツは作れない?」など、シンポジストたちは次々と質問攻めに。閉会後の名刺交換会でもその勢いは止まらず「この機会に私たちが日頃抱える悩みをぜひ相談したい」と列ができていきました。

人気コーナーとなった「当事者発表」へ。発表を終えた利用者さんには、会場から盛大な拍手が贈られました。
悩み解決の糸口を求めて
来場者からの質問が次々と





研修・育成プロジェクト

財団では、小倉昌男賞受賞者や有識者を講師として招き、全国の施設運営者・職員を対象に実践的な研修会などを実施しています。利用者さんの給料アップはもちろん、事業の発展、見直し、専門的な技術・考え方を学ぶ機会をつくっています。

農福経営実践塾

農業を事業とする施設の責任者を対象に農業で給料アップするための事業経営を学び、実践に活かしていきます。

第4回 農福経営実践塾

2026年5月29日(金)～30日(土)
社会福祉法人 くりのみ園(長野県小布施町)

1日目

1. オーガニック福祉農園の経営について 2. 商品開発・6次化とブランディングについて

1日目は、くりのみ園・島津理事長の「オーガニック福祉農園の経営について」と(株)エススリー・ブランディング・川田社長の「商品開発・6次化とブランディングについて」の講義を開催。講義後に各塾生から、講義に対する質問や現場での課題感についての質疑応答も含めて有意義な時間となりました。その後、参加した各塾生から、1年間の成果発表と2日目へ向けての実践計画の発表を行いました。一人ひとりの発表はそれぞれの特色があり、各塾生が真剣に取り組んでいることが伝わってきました。最後に発表を聞いた塾長から各塾生への講評をして1日目が終了しました。



2日目

2つの農場での現場見学・実務体験から 新たな気づきや学びを得る

2日目は、1日目に講義していただいた島津理事長のくりのみ園の現場を訪問しました。くりのみ園スタッフの方が案内役として、小布施農場の鶏舎や畑などを見学。塾生は移動して見学するたびに、スタッフの方へ熱心に質問するなど、活発な意見交換も行ったり、真剣にメモをとる姿も見られました。畑での実務作業も職員と一緒に体験するなど充実した時間を過ごしていました。最後には、長野農場へ移動し、「なちゅらるショップくりのみ」で6次産業くりのみブランドの商品を購入して、この2日間の感想を塾長や各塾生が発表して終了しました。



販路拡大研究会

本研究会では、互いのノウハウや情報を共有し、商品づくりや売り方を磨き合います。工賃が現在の2倍、もしくは5万円の達成を目指します。

学びを重ねて、いよいよ実践へ。「売る力」を磨く研究生たち

第8回

2026年 7月16日(木)～18日(土)
株式会社Akari(愛媛県松山市)



FCPシートを発表し、講師や参加者からアドバイスを受ける



パイ専門店「Tsutsumi」を見学。売り場づくりや商品の見せ方についても学びました

商品の魅力を 伝わるカタチに

パイの製造・卸売りや専門店「Tsutsumi」を運営し、障がいのある社員を中心に地域に愛されるお菓子づくりを行う株式会社Akariを訪問。講師の株式会社プラスリジョン代表・福井佑実子氏の講評を受けながら、FCPシートを使って商品の魅力や強みを整理しました。バイヤーの目に留まる伝え方や自店商品をより魅力的に見せる工夫、SNSでの情報発信についても、参加者同士で意見を交わしながら実践的に学びました。

第9回

2026年 8月21日(金)～22日(土)
社会福祉法人さっぽろひかり福祉会(北海道札幌市)



地産地消と「作り立てのおいしさ」にトコトン拘る、ひかり福祉会様のものづくりの現場を視察



12月のプロジェクトに向けて、マーケティングフレームやサンプルを広げながらアドバイスを交わし合う研究生たち

地域に出向き 売る力を磨く

パンと大福の移動販売を軸に、年間1億円超を売り上げる社会福祉法人さっぽろひかり福祉会を訪問。地域密着の販路づくりや継続訪問による信頼づくりを学びました。さらに、財団を顧客とし、ギフトボックス250個を12月に納品する実践機会を設定。当研究会会長の社会福祉法人共生シンフォニー・中崎理事長と株式会社プラスリジョン代表・福井氏の助言を受け、研究生は販路拡大につながる商品づくりを議論しました。

働く力と工賃向上基礎セミナー

テキストと全国の実践事例から、工賃向上につながる支援を学び、障がいのある方の「働く力」を育む実践に生かしていきます。

セミナーでの実践報告を磨き 学びと人材育成のあり方を考える

6月26・27日、ヤマト運輸羽田クロノゲートで「働く力と工賃向上基礎セミナー」に向けた全体会議を開催しました。同セミナーでは、障がいのある方の「働く力」を育み、工賃向上につなげるための支援の理論と実践をまとめたテキストを活用します。

1日目は、今秋のセミナーに向け、テキストの「実践編」を執筆した委員9名が、各事業所で取り組んできた支援の実践をPowerPointで発表。菅野敦氏(東京学芸大学名誉教授・(社)武蔵野千川福祉会理事長)から助言を受け、発表内容を練り上げました。

2日目は、既存メンバーがメンターとなり、新たな塾生が所属する事業所に約2年間伴走する人材育成事業について協議しました。事業所への訪問や集合研修を通じて課題改善を支援し、工賃や利用者の「働く力」の変化に加え、メンター自身の成長も成果として捉える方向性を確認。参加者の選考条件やエントリーシートの内容、成果の測り方、今後のスケジュールなどを話し合いました。



セミナー情報

2026年度「働く力と工賃向上基礎セミナー」

菅野敦氏による基調講演をはじめ、福祉施設の職員による実践報告と解説、登壇者との交流セッションなどを実施します。今回の全体会議で内容を磨いた委員の実践報告も、各会場で発表されます。

東京会場

10月24日(土)
田町グランパーク
カンファレンス

大阪会場

10月31日(土)
梅田スカイビル

福岡会場

11月7日(土)
福岡県中小企業
振興センター

2026年度 ヤマト福祉財団農業ボランティア

ヤマトにできることを、地域の力に

ヤマト福祉財団は、ヤマト運輸労働組合と連携し、障がい者施設の収入アップと地域とのつながりづくりを目的に、ヤマトグループ社員が参加する農業ボランティアを実施しています。
春・秋の年2回、今年は高知県と和歌山県で、施設のみなさんと一緒に農作業に取り組み、交流を深めています。

一緒に手を動かすと、距離が近づく

この春も、ヤマトグループ社員やその家族が農園を訪れ、利用者のみなさんと一緒に農作業に取り組みました。大勢で力を合わせることで、普段時間をかけて行っている作業を少しでも後押しできるのが、このボランティアの役割の一つです。利用者の方々に

作業を教えてもらったり、声を掛け合いながら手を動かしたりするうちに、自然と会話や笑顔も広がります。訪れる側、迎える側という垣根を越え、同じ作業に取り込む仲間として過ごす時間。高知と和歌山で、この春も新しい交流が生まれました。

5月
23日

南国にしがわ農園・ヤマト運輸労働組合高知支部
教える、教わる
そこから始まる交流

高知では、雨のため予定していた屋外作業を一部変更し、グアバの葉の収穫や洗浄、木工作業に取り組みました。利用者のみなさんに教えてもらいながら、子どもたちも一緒に作業。「葉っぱを洗うと

ころが楽しかった」と笑顔をみせました。利用者さんも「大勢でやると、やっぱりすごく楽しい」と話し、子どもたちにも自然に声をかけながら一緒に手を動かす姿が見られました。



「利用者のみなさんから積極的に声をかけてもらい、本当に楽しい一日でした。これからでもできることで協力していきたいです」と黒川執行委員長(右から2人目)

6月
20日

はまゆう作業所・ヤマト運輸労働組合和歌山支部
大勢の力で、いつもの
作業を後押し

和歌山では総勢52名が、利用者のみなさんと枝豆の収穫を行いました。大勢で力を合わせたことで、普段は1日かかる作業を1時間余りで完了。その後は枝からさやを外す作業も行いました。参加者が利

用者のみなさんに作業のコツを尋ね、教わりながら手を動かす場面も。利用者の方からは「こんなに大勢で少し驚きました。でも、手伝ってもらえるのはとても助かるし、うれしい」との声が聞かれました。



「誰かのために動くことは、自分自身の豊かさにもつながる。これから長くお付き合いできる関係を築いていきたいです」と赤崎執行委員長(左端)



(写真上) 和歌山では大勢の参加者が力を合わせ、枝豆の収穫に取り組みました。
(写真右) 山内理事長もグアバのビニールハウスを訪れ、利用者の方々と栽培について語り合いました。





子どもたちもグアバの葉の洗浄に挑戦。初めての体験を楽しみます



一緒に手を動かすと、自然と会話も弾みます



グアバの木で木工体験も



DATA

南国にしがわ農園 (高知県南国市)

農業・肥料・除草剤を使わない自然栽培でグアバを育て、有機JAS認証も取得。農作業や加工を通じて障がいのある方の働く場をつくり、グアバ茶などの商品づくりにも取り組んでいます。



小さな手で一生懸命お手伝い



みんなで手分けして、グアバの葉を一枚ずつ丁寧に収穫しました



ピーマンの袋詰めも手伝います



大勢の力が合わさると、枝豆の収穫がぐんぐん進みます



「普段は運ぶ側ですが、収穫から商品ができるまでを知る貴重な経験になりました」と石田主管支店長(右)



DATA

はまゆう作業所 (和歌山県田辺市)

1997年の開設以来、農業を中心に年間100種類以上の野菜を栽培。農産物の販売に加え、ヤマト福祉財団の助成で整備した厨房を活用し、自家栽培の食材を使う「カフェ&レスト」も運営しています。



利用者さんに教わりながら作業



「手伝ってもらえてうれしいです」



2025年度 ヤマト福祉財団 収支概況

社員の皆さまのご支援が、障がいのある方々の「働く」を支えています

2025年度も、皆さまから賛助会費や夏のカンパなど、多くのご支援をいただきました。皆さまからお寄せいただいた想いは、障がいのある方々の工賃向上や自立支援、人材育成など、さまざまな事業に活かされています。



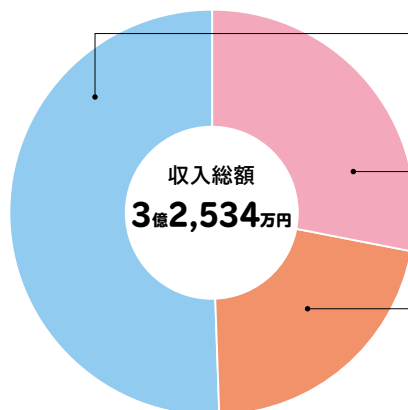
収入の部

会員の皆さまが支える活動資金

賛助会費 + 寄付金
(夏のカンパ等)

約 **50%**

財団の活動収入の約半分は、ヤマトグループ社員の皆さまからの賛助会費と夏のカンパによって支えられています。



基本財産運用収入

1億6,351万円

50.3%

賛助会費

9,221万円

28.3%

寄付金(夏のカンパ等)

6,962万円

21.4%

支出の部

ご支援は、このような事業に活用しました

その他(復興・再生支援事業ほか)

934万円

2.8%

大規模災害等で被災した障がい者施設や支援団体に対し、事業再開や施設の復興・再生に向けた機動的な資金支援・物支援を行っています。

顕彰事業

1,387万円

4.3%

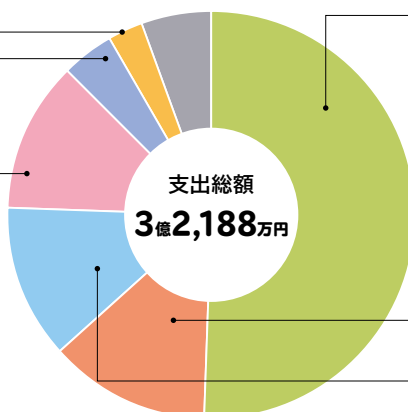
障がい者雇用の拡大や工賃向上に大きく貢献した施設・団体のリーダーを称える「ヤマト福祉財団小倉昌男賞」の選考・贈呈に活用しています。

団体・活動支援等事業

3,852万円

12.0%

当財団と同じ目的で活動している外部団体への支援活動等に加え、ヤマトグループ社員による農業ボランティア活動など地域とのつながりを広げる活動も行っています。



助成事業

1億6,327万円

50.7%

大型洗濯機・乾燥機、農業機械、障がい者施設の設備導入など障がいのある方々の働く環境づくりを支援。また、障がいのある大学生への給付型奨学金にも活用しています。

広報事業

4,115万円

12.8%

財団 NEWS の発行やホームページでの情報発信などを通じて、障がい者福祉の現状や財団の取り組みを広く伝え、理解を深めていただくために活用しています。

研修・育成事業

3,883万円

12.1%

パワーアップフォーラムや農福経営実践塾など、福祉施設職員のスキルアップや経営力向上につながる研修を開催し、障がいのある方々の給料向上や自立を支援しています。

※法人管理費 5.3% 1,690万円

● 助成事業以外にも、このような活動に皆さまのご支援がつながっています。

パワーアップフォーラム
(研修・育成事業)



施設職員が学び合い、工賃向上に向けた実践力を高める場を支援

農福経営実践塾
(研修・育成事業)



農業を通じて、福祉施設の経営力と利用者の働く力を育成

農業ボランティア
(団体・活動支援等事業)



事業所でのボランティア活動で、地域とのつながりを広げる取り組みを応援

ヤマト福祉財団 小倉昌男賞
(顕彰事業)



障がい者の自立支援や工賃向上に尽力する実践者を表彰

賛助会員の皆さまからいただいた会費や夏のカンパは、障がいのある方々が地域で安心して働き、活躍できる環境づくりを支える大きな力となっています。これからも温かいご支援をよろしくお願いいたします。

TOPICS
1

夏のカンパに込められたあたたかい思いを 障がいのある方々の支援へつなげていきます



本年度も、ヤマトグループ企業労働組合連合会ならびにグループ各企業、関係団体の皆さまから、夏のカンパとしてヤマト福祉財団へ6,039万3,000円のご寄付をいただきました。9月に開催されたヤマト運輸労働組合第81回定期中央大会（新潟県・湯沢カルチャーセンター）での贈呈式では、ヤマトグループ企業労連の森下会長から目録が贈呈されました。

挨拶で山内理事長は、寄せられたカンパを「浄水器の『浄』に財産の『財』と書いて『浄財』。本当に清らかで汚れない貴重なお金です」と紹介。「この浄財を、障がいのある方々が前向きに頑張る支援に活用させていただいています」と説明し、カンパへの感謝を伝えました。また、全国の障がいのある方が1,100万人を超え、11人に1人にあたることに触れ、小倉昌男氏の「障がいのある人もない人も、みんなが幸せに暮らせる社会をつくろう」という思いを実現していきたいと語りました。

さらに、15年間中央執行委員長を務めた森下会長へ感謝を伝え、団体交渉のたびに「仲間の思い、頑張りに報いてほしい」と語っていた姿を回想。小倉氏の「労働組合は会社の神経」という言葉にも触れ、現場の痛みや問題、お客様や世の中の変化を伝えることの大切さを説きました。ゴルフ宅急便なども現場の声から生まれた例として挙げながら、現場の声こそヤマトをより良くする力になると強調。最後に、財団として皆さまと一緒に、すべての人が幸せに暮らせる社会をつくっていききたいと結びました。

TOPICS
2

必要とされる喜びを胸に、 働き続ける歩みを分かち合う一日

社会福祉法人ヤマト自立センター
第18回卒業生の集い



4月25日、埼玉県志木市民会館で「第18回卒業生の集い」を開催しました。当日は、2025年度にスワン工舎新座・スワン工舎羽田を修了し、企業へ就職した新卒者14名への修了証授与と、就労から10年を迎えた永年勤続者5名の表彰を行いました。表彰者には表彰状と記念品が贈られ、10年にわたり働き続けてきた歩みを会場全体で祝福しました。会場には卒業生76名をはじめ、ご家族、来賓、企業関係者、職員など多くの方が集まりました。開会にあたり、山内理事長は、卒業後もヤマト自立センターの仲間であること、困ったときには自立センターや仲間とつながれることを伝え、卒業生へ温かなエールを送りました。

第2部では、ヤマト自立センター理事の相浦卓也様による乾杯の

発声で懇親会が始まり、永年勤続者へのインタビューやクイズ大会を実施。インタビューでは、清掃、接客、調理、販売、病院内業務など、それぞれの職場で担っている役割や、これからの目標が紹介されました。企業の方からは、丁寧な仕事ぶりや周囲への声かけ、後輩の手本となる姿勢への期待が語られ、ご家族からも働き続ける姿への喜びが寄せられました。最後には参加者全員で記念撮影を行い、会場は終始、笑顔と拍手に包まれました。卒業後も仲間と再会できるあたたかな一日となりました。

表彰された永年勤続者の就労先

- 株式会社サポート21 ● 株式会社スワン ● ホンダ開発株式会社
- 三菱電機テンダーメイツ株式会社 ● 公益財団法人 がん研究会有明病院

選べるしあわせ 届くよろこび 広がる笑顔

2026 Happy Christmas

スワンのケーキで、
今年も心あたたまるクリスマス。



ハッピースワン
ア・ラ・カルト

8種類の味を一度に楽しめる、彩り豊かなアソートケーキ。お気に入りのひと切れとの出会いをどうぞ。

今年も、選ぶ楽しさいっぱいのクリスマスケーキが揃いました



ハッピー フリュイ・ルージュ

新潟県産コシヒカリの米粉と豆乳クリームを使用。8大アレルギー不使用の、みんなで楽しめるケーキです。



ハッピーサンクス
宅急便 50th ケーキ

クロネコから「ありがとう」。ヤマト運輸の宅急便50周年を記念した、チョコレートの味わいを楽しむ特別なケーキです。



ハッピー モンブラン

栗の風味を楽しめる、上品な味わいのモンブラン。渋皮栗とマロンクリームで、栗のおいしさを重ねました。



ハッピー
ガトー・フロマージュ

じっくり焼き上げたバイクドチーズケーキに、ふんわりホイップクリーム。チーズのコクを楽しめる一品です。

他にも、シュトレンをはじめ、デリセット（キッシュ&ピザ）、ビーフシチューパイなど、クリスマスの食卓を楽しむ商品も扱っています。



おいしく召し上がっていただくために

スワンのクリスマスケーキは、クール宅急便の品質と冷凍・包装技術で、おいしさとともに大切な人への「想い」もお届けします。冷凍ケーキは、箱のまま冷蔵庫（10℃以下）に入れて解凍してください。シュトレンは常温でお届けします。

ひとつのケーキから、 広がる笑顔



有志の方々による「福祉施設の子供たちへ」の企画では、昨年より誰もが参加できる仕組みをつくり、1,800個以上のケーキをお届けしました。子供たちからは、たくさんの「ありがとう」の手紙も届いています。若者支援施設からは、みんなでケーキを囲む時間が心豊かな体験になるとの声も寄せられています。ケーキを通じて笑顔や社会とのつながりを生み、社会参加のきっかけにつながるよう、これからもケーキを届ける輪を広げ、皆さまの想いを届ける橋渡しを続けていきます。

ご予約期間

10/23(金) ▶ 11/25(水)



お問い合わせは 株式会社スワン ☎ 0120-230-787

お届け期間

12/20(日) ▶ 12/24(木)

- 障がい者施設からご予約いただけます。
- お届け日は指定できます。

購入サイトは
コチラから

